

郷土資料の散歩道

図書館郷土資料室

☎21-6111

流 虬 百 花 譜



本草学者佐藤平三郎が描いた琉球（沖縄）の植物図譜

今回は米沢図書館の「米沢善本」の中から「流虬百花譜」を紹介します。流虬（琉球・現沖縄県）に植生している草花・果実類を描いた図譜で、美濃判の冊子二冊に、九七種一〇一枚の図が鮮やかな彩色で描かれています。二冊ともに「興譲館蔵書」の印が押され、藩校興譲館から伝来したものです。著者は本草学者佐藤平三郎成裕（号・中陵）です。本草学とは、薬草や鉱物など薬物を調べる学問で、日本では江戸中期頃から盛んとなり、次第に薬物以外の物にも注目し博物学的に発展しました。佐藤は江戸の植木屋に生まれ、幼少から本草学を学び関東地方の薬草採取を行い、天明元年（一七八一）から三年にかけ薩摩藩に招聘され薩摩・琉球を調査し、その後も白河藩・米沢藩・会津藩・備前中松山藩（岡山県）などに招かれ、薬草の採集や製薬法の指導を行なっています。その著作も多く、「流虬百花譜」「薩州物産録」「山海庶品」等の図譜類や随筆「中陵漫録」が有名で、寛政十年（一七九八）には日本で初めての椎茸栽培法を記した書物を著したことで知られています。



▲朱薬（ザボン）の大きな実が描かれている

鷹山の招きで米沢へ

佐藤が米沢藩に招聘されたのは寛政四年（一七九二）の八月で、佐藤の側には御用係の藩士のほか、数多くの医師が門弟に選ばれ、本草学の概要や採薬・製薬の方法等を学びました。また、時には鷹山の住む餐霞館に招かれ、鷹山や重臣等に諸国物産の話を進講し、領民には椎茸栽培法を教授したと言われています。

領内の薬草調査も積極的にを行い、「中陵漫録」には、吾妻山山頂や小国を経て三面（新潟県朝日村）まで廻り、珍草異木を数多く採取したことが記されています。

米沢藩医学の進展と
医学学校好生堂の開校

佐藤は一年余の指導を終



▲沖縄を代表する花、ハイビスカス

え、翌寛政五年十月に江戸へ出発しますが、米沢藩では藩主治広が酒食の宴を開き、謝礼に銀一五枚と綿五把を贈っています。

佐藤の指導を受けた藩医等が中心となつて医学学校好生堂が開校したのは寛政六年十一月のことです。そこには佐藤の指導による薬草園が造られたほか、餐霞館や北寺町にも薬草園が開かれました。さらに、享和二年（一八〇二）に米沢藩は飢饉に備え「かてもの」を印刷・配布しますが、佐藤に食用に適した植物を尋ねたのが発端とされます。佐藤平三郎の招聘は、米沢の医学発展に大きく寄与した出来事でした。

なお、「流虬百花譜」の写本は東京都立図書館所蔵本など数点確認されますが、この米沢本は佐藤を米沢に招いた時に門人が忠実に書写したものと考えられ、高い評価を得ています。